

小學讀本卷之二 終

小學讀本卷之三

田中義廉 編輯

第一回

水も、動物、植物の、養液に――て、世上、尤要用のもの
 あり、水ふきとれも、萬物、生育けうことを得ば、
 水に、静水、流水の別あり、池水、湖水ふとを、静水と
 いひ、河水ふとを流水といふ、
 湖水も、四面を、全く陸地の囲て、中窪ふる地に、溜
 りたる水あり、
 河水も、山間の谿谷より、湧き出でたる水の、不斷、

流れ行きて、海に注ぐものあり、
 諸此圖々、林中の湖あり、此水を、四面を、全く陸地
 の、囲みたるや、多に、流れ去る
 ことふし、

今も、夏日ありや、又冬日あり
 や、水葉の、茂りたるを以て、今
 も、夏日あるを知る、○冬日も、
 總て、水葉ふきや、然り、多くも
 水葉ふし、唯松柏の類のも、水
 葉あり、○野草も、冬日にても、生ぞるや、○否、生ぞ



ることふし、
 汝も、林中に、鳥あり、又水中に、魚ありと思ふや、○
 然り、こまあるべし、唯明々に、見ることを得る、
 草間に、流るゝ水上に、數多の、水鳥ありて、游泳せ
 り、水鳥も、閑静ある處を、好むものにて、其浮める
 處も、景色甚幽逸あり、



此圖も、亦林中の湖あり、これ、前
 の圖に、示したる湖と、同しきや、○
 然り、同し湖ふれども、我見る所の
 異なるあり、

今、湖上に浮ゆる舟あり、舟中、多くの人を載せたり、この人の、携へたる棒も、何あるや、これえ、水棹にて、舟を、動かす道具あり。○此舟も、何きの方へ行くや、これえ、左の方へ、行くあり。

此圖に示せる舟も、前の舟と、同じきや、○否、同トウらむ、此舟も、前の舟より、大にして、八人を載せたり、此中、六人も、手に櫂を携へり、

如何にして、舟を進むるや、櫂



を操りて、舟を進むるあり。○舟も、何きの方へ行くや、舟も、櫂を操りたる人の、後の方へ、行くあり。舟の、船主と、船主居る人も、何を爲すや、先の人を、水先を測り、後の人も、舵を操るるあり。

第二回

汝も、嘗て、狐の如く、狡猾ふりと云ふ、譬へを聞きしや、○もし、猫が、甚だ狡猾ふるとき、此猫も、狐の如く、狡猾ふりと云ふ、去まども、狐も、唯狡猾のふらむ、甚だ奸譎ふるものなり。○もし、人の、奸譎ふる所行を、爲すとき、彼人も、狐の如く、奸譎ふ

り云ふ

我今汝に狐の奸譎あることにつけ、一回の話を語るべし、

茲に一二の犬ありて、狐狩りに行きたり、其犬を狐を逐ひ迫りて、既に狐を捕へんと見えし所に、狐を逃げ隠るべき穴あらざれむ、茲に於て、奸譎の所行を爲せり、
偕其邊りに、低き石屏ありしを、狐も其石屏の方に、走りて、急にこまを飛び踰えたり、然きども、向ふへ達せると、直に走らむして、石屏の側に、潜

み伏せり、○此とき、犬も勢を極めて、飛び踰えしを、石屏の側に、潜を居たる狐を、飛び踰えて、真直に走りたり、其勢甚だ強きを以て、急に止まること能む、故に、狐の潜を居るを知らざりて、遙かに走り去きり、
此とき、狐も犬の通り過ぎを見て、光りの如く、石屏



の跡へ、飛び返り、其形を隠したり、○犬も、こまを知らざりて、唯石屏の彼方を、求むまども、再び見出ださることを得ざり、こま實に、狡猾なる狐にあらむや、此狐も、犬を、欺く術を知り、又其危きを、逃るゝことを、知るなり、

第三回

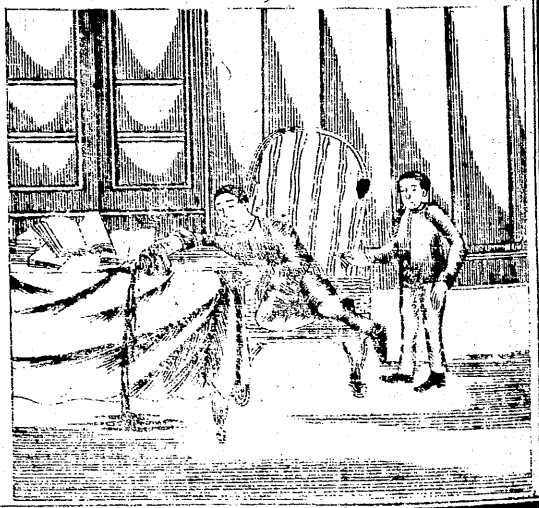
夫も、人と交るに、決して、虚言を語るべからむ、常に眞實を以てせよ、○衆人に對して、親切に交り、言ふ、必ず忠信にして、行ふ、必ず篤敬あるとき

も、衆人も亦我を愛して、身の幸福を得べし、汝も、虚言の、惡事たるを、知りや、○然り、屢々、虚言の、惡事あることを、聞けり、汝も、虚言を、語れを、幸福を得ることなく、又善人も、汝を棄て、顧む、○此の如くあるとき、汝も、何を以て、身の利益とふや、○一物も、其益を得ざりて、多く損失とふのみ、も、虚言を語き、汝の心に、惡事あることを、知るべし、惡事を犯したることを、知りて、心に、快とふをや、

我心は、惡事ありと、知りて、決して、これを犯さ
べからず、縦令、人の見ざる所にても、常に心を、父
母教師の、面前に、在ると同じく、慎むべし、これを、
其獨を、慎むといふあり、
故に、不善ある小兒も、幸を得ることなく、善良
して、正直なれど、神の冥助を得て、身の幸福あり、
且衆人も、常に彼れを愛さべし、
し、謹むの心なくして、窗を破り、書物を汚し、戸
口の鍵を失ひ、机上に、墨を流し、等の事あるとき
も、父、母、教師の、前に行き、其始末を、自ら訴へて、罪

を謝さべし

人も、身の幸福を願ふべし、
決して虚言を、語るべから
ず、苟も、他人を、欺くべから
ず、謹んで、眞實を、語るべし、只
此一事到底、善人と、ふるべ
き道あり、



人と約して、これを背くも、甚しき不善事あり、必
ず、衆人の、賤しきを免れど、努めて、一旦、約したる詞
を、正實に行ふべし、若し衆人の、賤しきを受け、又明

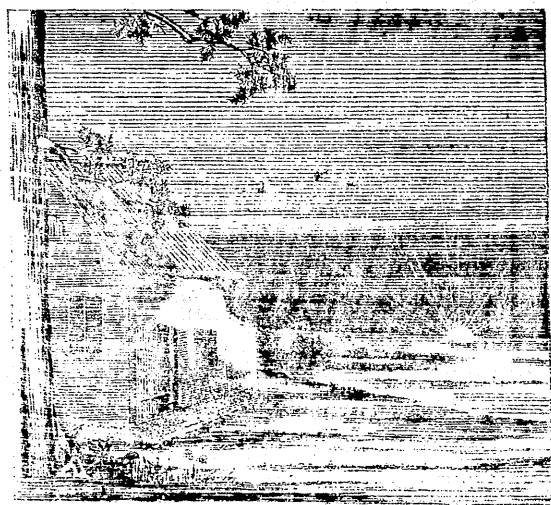
友に、信を失ふとき、縦令ひ、學術に通むとも、
其身の、發達をうことふし
惡事と、小ふりといへども、忽に爲れべうらむ、其
一念、漸々増長れるとき、是非を明にし、善惡を
審にまゐること、能もざるに至るものあり、人若し、
我心に、善惡を審にまゐると知れ、努めて、善に就き、
惡を去り、虚言を語らば、約束に背らば、其心の、快
うらんことを求むべし、これを、其意を誠にそと
いふふり、人々、此の如くふるとき、必に神の眞
助を蒙り、衆人の敬愛を得て、其身に、大なる幸福

あるものあり、

第四回

夜、將に明けんとす、雞先づ鳴く、夜既に明く、鳥雀

鳴く、
汝も、寢所に、在りたるとき、
雀の鳴くを、聞き、や、この
鳥も、皆夜の明くる後、猶眠
れることふし、故に、人とい
て、鳥雀に劣るべうらむ、因
て、鳥の聲を聞くとき、直



に、起き出づべし。
夫れ、神々晝間、日光を與へて、人々の業をふせよ。
使ふらむ然るは、夜の明くるのち、猶寢所は在
るも、神の恵みを失ふものなり。故に汝等、必ず夜
の明けたるとき、直に起き出で、業に就くべし。
此、身を立つるの初めなり。
幼稚のものも、夙に起き、晚く寝ねて、出精勉強し、
無益に時をついやさず、ことあるべし。然るとき
も、その習ひ性とあり、壯年に及びて、業を勉むる
に、倦怠の心を生むることあるべし。

朝眠に時をついやさず、無益あるのみにあらず。
又神の恵みを、受けざるあり。
且夫れ神々、萬物を、妄りに與へざりて、唯、出精を
する人に、與ふるものなれど、身の勉強も、恰も幸福
を生む母の如し。
されど、人々、能く勉強して、身の幸福を祈るべし。
勉むれど功あり、戯れも益あり。今日、勉めむして、
明日ありと、云ふことあるれ、今年、學をむして、來
年ありと、云ふことあるれ、光陰も矢の如し。一度
去りて、復還らむ、壯年に至りて、一業、一事も、習ひ

得たる藝なく、遂に貧窮困苦に陥いるも、皆自ら招くの災あり、

第五回

二人の朋友あり、今共に野邊に出で、樹陰の苔上に、息へり、今この地も、野草、灌木の、茂れるを以て、氣候の夏ふることを知りたり、一人も、肘を地上に置き、一巻の書を開きて、これを讀



めり、今人々、物々、其文を聴くことを喜ぶに似たり、我、今其聲を、聞うざれども、其顔色を見るに、喜びて、聴きうることを、知れり、○何によりて、其顔色も、喜悅の心を、表するや、○微く、笑へる色あるを以て、其喜悅の心あるを知るなり、夫れ、人も、口を開くども、其笑ひを、含めるとき、心に喜びあるを、告ぐるゆゑに、其目と、顔色も、喜怒を、人に知らしむる微あり、裏に、喜怒、哀、樂の情あれむ、如何に、これを隠さんと、欲せるとも、顔色の微も、覆ふこと能わざ、

人に對しても不平の心を、懷くべからば、親切に
ふまべし、如何にとふれむ、我心に怒りを含
み、又も、不平の心あり、或も、不幸あるとき、或も、懶
惰の心あるとき、必ぞ、これを、人に、告ぐるもの
あるも、あるあり、

第六回

屋上に、青山あり、屋下流水碧あり、花の香も、衣裳
に襲き、竹の翠も、枕席を侵も、鬱たる新柳も、聲を
弄して、黄鳥を留め、塊たる古松も、自ら吟して、清
風を得、四圍の高樓、林頭に聳へ、數里の春色、眼中

に落入樓上、萬巻の藏書あり、其うら、良机、軟榻
有り、く、香、一室、唯、意の適
する所に、随ふのみ、
實に、この家の景色も、閑雅、
幽逸、ふらむや、斯る、美麗の
家に、住居する人も、君、樂ま
ことふるべし、
然れども、此家の住人も、當
時、甚だ、不幸にして、愁傷も、
其愁傷する所以も、此家の

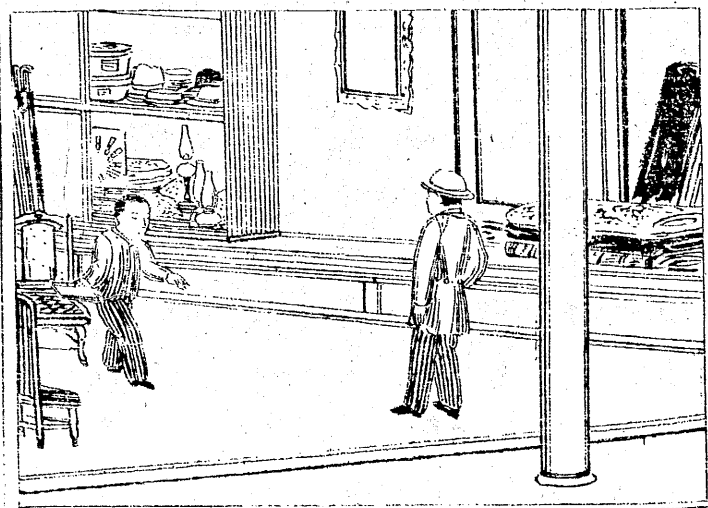


小兒今重き病に罹れるゆゑ、父も深く悲ひ、
これを抱き立てり、
汝も椅子に寄りたる女を、何人と思ふや、○これ
も病みてをる、小兒の母なり、
此母も小兒を能く愛するゆゑに、病を甚だ心配
す、實に母も小兒の病氣を重症と思ひ、悲めるか
り、○我もこの小兒の早く全快せんことを願へ
り、
總て父母も小兒を親切に愛育す、我等幼稚のと
も、父母の親切に愛育し給ひしこと、亦此人等の

如くあるべし、
凡世間にある人も、貴きも、賤きも、父母の生まざ
る人あり、されど父母も我身の出来し本なれど、
本を忘るまじきことあり、況んや養育の恩、山よ
りも高く、海よりも深し、父母も、この幼きかとよ
り、晝夜艱難、苦勞して抱き育てたるものなれど、
其厚恩を深く思ひ、孝順の心怠るべからず、
子の父母に、つゝへて孝順あるを、神より命じた
る勢めなれど、これを忘るべからず、苟も不孝の
行ひあれば、人も憎み、又必ず神明の責を蒙るも

のあり、
 天津神も我に、性命をさづけ、我を守りて、幸ひを、
 與へ給へるものあれば、神に代りて、我を、養育
 するを、父母あり、されむ、父母を、神明と、同しく、敬
 ひ、尊むべし、何事も、父母の仰せに順ひて、逆ふこ
 とあるを、孝順といふ、
 も、父母の仰せに、逆ふことあれば、神の責を受
 けて、禍は遭ふゆゑ、父母の、誡めを、こが身の及
 ぶざる所を、補ひ助くるものにして、即ち、神明の
 仰せありと心得、決して、背くべからむ、

昔年一人の男子あり、其人とあり、温順にして、幼
 稚のときより、両親に仕ふ
 るに、たぐひなき、孝行のも
 のあり、元來、その家、富める
 よあらざれども、人の貧き
 を、憐み助け、總て人に交う
 に、信實あれば、誰となく、此
 男子を、善人ありと呼びあ
 へり、幼きとれ、近郷の家
 に、僕たりしが、夙に起き、夜



半に寝ねて、一事一業も、怠慢あることなく、閑暇あるときも、手習に心を盡し、又好みて、書物算術を學びたり、由て程なく、利發の人とされり、主人より、暇を與ふるときも、已の隨意に、遊ぶことなく、必じ我家に到りて、父母の安否を問ひ、終日膝下にありて、其用を達し、父母の心を慰むるのみ、主の家を、由で、後々、些細ある商ひを、渡世とせしが、人々、此男子が、直ふを知りて、其品を信じければ、幾んどなく、豊かに暮しける、

父にも、早く、別れ、母ひとり、を養ひしが、晝夜、怠りなく、介抱して、苟も、母の心に、違ふことなく、又、自分の行ひも、假にも、母の、思ふと思ふことを、あさむ、常に、善事を行ふことを好みて、人を憐み助け、禽獸、草木までも、能く、心を用ゐて、慈く育ひければ、其家、次第に、繁榮して、富貴の身とされり、凡、至孝を、せしめて、其所行の、善あるを、世人、感賞せざるもの、あつりといふ、夫れ、孝え、萬善の本といふ、宜あるう、此男子が生涯の所行、正直、仁義、學をせしめて、善美を盡し、其

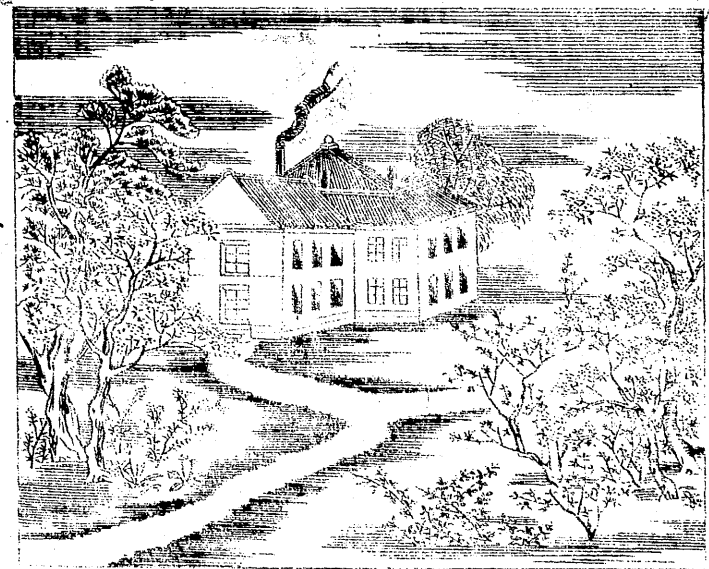
由て、生むる所、皆、孝より、
故に、世の人、皆、其善行徳義を、感賞するを以て、終
に、其身を、福祿を得るに至れり、
父母に仕へて、孝順ふるを、天地自然の道として、
人々、須臾も、此道を離るべからば、然るに、外物の
爲に、これを奪えれて、其道を失ふことあり、も、
天地自然の道に、由らんと欲せど、察めて、邪惡の
念を去り、善行徳義を、體認せし、
抑至治隆盛の世に生じ、安樂、鼓腹して、妻子を、養
育することを得るものも、聖諭を奉戴し、國法に

從順し、仁義の道を、離るべからば、慎みて、教令の
旨を守り、各、その分に、安んじ、其業を勤め、其親を
親し、衆を愛するときは、求めむして、幸福を得
ること、此男子の、如くふるべし、

第七回

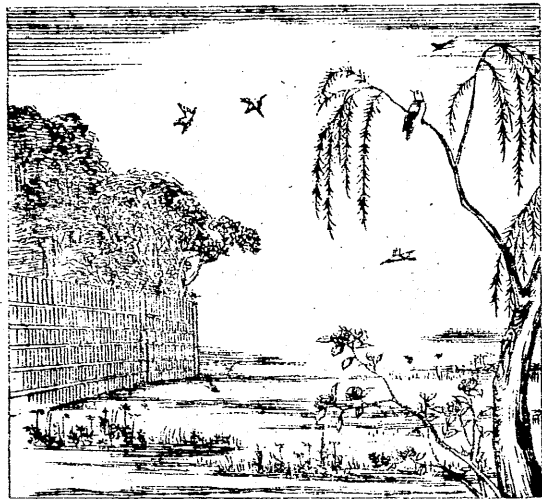
此家も、田舎の富家なり、其四面も、好き景色に
て、芝林、花園あり、
芝地も、一面に、細草を裁みたる、平地にして、華美
ふる家の前後にも、芝地を設く、
汝も、この家の圖を、能く見たるのち、其模様を詳

に、記をべー、
 此屋根も、數多の棟に、分
 れたり、
 屋根の上に、突き出でた
 る、烟筒ふり、これも、煖
 室爐の烟りを、出だも、爲
 めに、用ゐるふり、
 汝も、物を見るときも、
 何に、用ゐるべきことを
 考へ、又、其形ちを、能く記憶をべー、



物を見るときも、其用を考へ、又、記憶せざる人も、
 終身事を識ること能をべ、

第八回



此圖も、春日の景色ふり、群
 鳥も、飛揚して、ともに歌ひ、
 蝶蜂も、嫩草の上に、舞ひ遊
 べり、
 林木も、嫩葉を生し、草も、新
 緑を發して、地を覆へり、
 総て、天生の物も、春に至る

とき、美なる衣裳を着けり、
少年の人を、一生中の、春時おれを、學文、才能の、種
子を、蒔くときあり、
年少あるものも、精神も充満し、年數も十分おれ
む、勉強して、生涯の安樂を願ふべし、
少年のとき、勉強せざるも、一年の春時に、種子を
蒔うざると、同し、理にて、生涯、智識を開くことお
し、
斯る、少年等も、縱令ひ、富貴の家に、生まるゝと云
ふも、遂にも貧窮とあるべし、

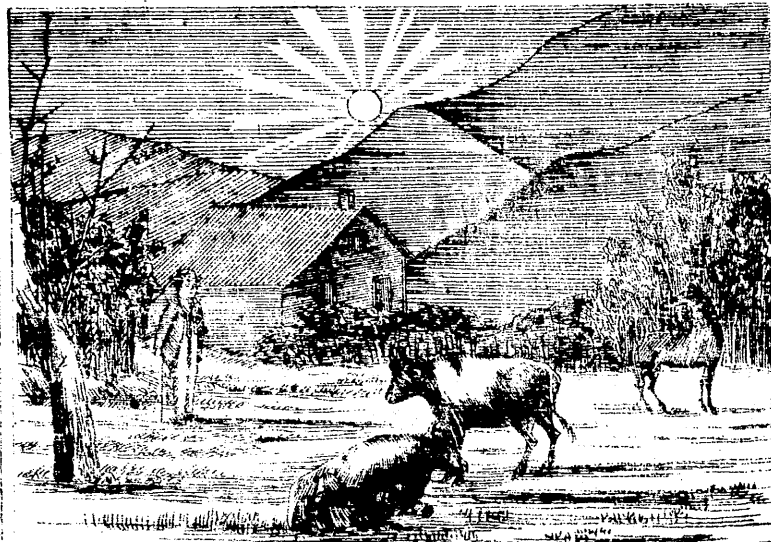
今、世上に富貴ある人と、貧賤ある人あり、此人の
智識と、行ひと、を見れば、富貴ある人も、智識も開
けて、行ひも、亦甚だ正し、これ皆、少年のとき、必む
勉強したるものあり、又、貧賤とある人も、智識も
よく、行ひも、亦正し、これ皆、少年のときよ
り、勉強せざるものあり、
されむ、人として、幼少のとき、師の教へに、從事し
て、道を聞き、一身一家を、立つることを學ぶべし、
もし、怠惰にして、學むざるときは、遂に困窮、貧苦
して、生涯、安樂の時あり、

師傳を、父母に替りて、兒童を訓誡し、善道に進む
ることを教ふるものにて、我身に善教と、規矩を
授け、又學術を教へて、我資益をおさる由り、父母
に等しく、尊敬して、これに從順し、其恩を顧るべ
し。

第九回

夫れ人も、萬物の靈ふれど、禽獸、蟲魚と異なりて、
能く真直に立ちて歩行し、獸を匍匐して歩行を、
獸も、能く物を見、香を嗅ぎ、聲を聞き、食を味ふこ
と、人と同じ、○獸も、聲を發せれども、言を出だし

て、語ることも、能む人も、
能く言を出だして、意中
を語ることを得、又能く
諸物を推考し、物理を解
せれども、獸も、これを推
考するの才力あり、
夫れ、この世界も、全く、人
の住居する爲に、造りた
るものにて、即ち、世界も、
人の住家あり、



神も、人を——て住居せしめんとて、此世界を造り
給ひ、又太陽を造りて、晝の間も、日光を與へ、月を
造りて、夜を照らし給へり、神も、人の目を歡まし
めんと、欲して、地上に緑草を生じ、山林は、美花を
開きたり、
人も、食物を求むるものゆゑに、田野に於て、穀物
を與へ、山林に於て、鳥を與へ、河海に於て、魚を與
へ給へり、

人も、衣服を求むるものゆゑに、水綿、蠶を生せしめ、或
は野獸の背に、長き毛を生せしめ、これを製して

衣裳を造ることを得せしめ給へり、

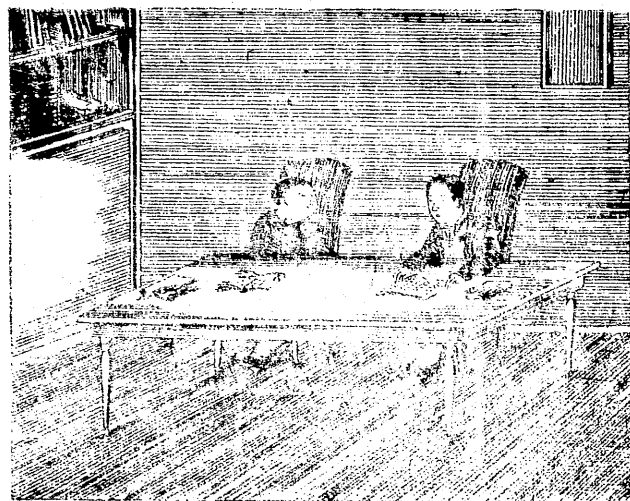
人も家屋を造り、又諸の器械を、求むるものゆゑに、地
中より、銅、鉄などを、出だして、これを造らしむ、總
て、人の求むる品も、——として、與へ給ふざること
あり、

人も——清音を好むとき、鳥、これが爲に歌ひ、佳
香を好むとき、花、これが爲に馨し、暑日に、雷
雨ありて、好風、これと共に來り、寒天に、枯木あ
り、燒きて、以て、煖を取るべし、これ、皆、神の賜もの
にして、所在充満せざることあり、且、夫れ、地上及

び、海中にある、萬物と山林の花丹、草木の花實、禽獸、蟲、魚等も、皆人に與へ給へるものなり、神既に、この諸物を、人に與へて、不自由なうらゝむ、故に人々謹みて、神の賜ものを受け、我身の生活會計るべし、然れども惡心、惡行の人、決して世界中に、充満したる賜ものを受くること、能わざして、生涯貧窮なり、人々も、生涯の安樂を、願ふ、善道を行ひ、謹みて、神の賜ものを受くべし、

第一回

茲に、二人の童子あり、一人は手に書物を持ち、これを読み、此童子は勉強して、能く書物を讀むと見えたり、其書物も、久しく用ゐたれども、猶新き物の如し、よりにて、この童子も、怠惰ならむして、又書物を大切に、おまことを知るべし、



彼れも、曰々學校に、行きて、小學讀本を學び、一回を、習ひ得れども、能く諸誦して、忘るゝことあり、今、一人の童子も、怠惰のものと見えたり、如何にとおれども、彼れが持ちたる書物も、悉く汚ま又所々裂け破れたるのみあり、

此童子も、其書物を勞して讀むとも、忘れたる處數箇條おれども、通して讀むこと能くば、彼れも元より、書物を好まざるのみ、に、學びたる所を、多く忘るゝあり、

汝も、彼れの顔色を見て、書物を好まざること

知るや、○彼れの顔色も、怠惰あることを表せり、もし、彼れも、善良にして、能く書物を讀むことを

好めば、其顔色斯の如くに、見ゆることあり、

善良ある童子も、必ず聰敏は、見ゆるものおれども

斯る顔色とも、異あるものあり、

彼れも、書物に、能く、心を用ひざるのみ、に、破れ汚

れたり、斯る懶惰のもの、遂に困窮、卑賤の身と

あるべし、

書物を、奇麗なまると、良善ある童子の常の所行にて、珍しきことにあらざる、書物を破り汚ま、非

常の惡——き兒に——て、尤誠むべきことあり、

第十一回

昔——一人の怠惰あるものあり、常に職業をふさ
む、今、これを次の圖に示せり、
此ものも、幼稚のときより、物事に勉強せざるも
ゑ、遂に、怠惰あるものとありて、職業を爲ること
能む、此故に、晝も常に坐——て居り、或も唯眠る
のみ、

彼れ、今、壯年に至りても、猶舊時の怠惰を、改むる
こと能む、故に、其家貧く——て、衣裳も、帽も、甚だ

古びたり、

彼れも、好き衣裳を、好まざるにえ、何らぞ、されど
も金あく——て、如何ほど、好き衣裳を得んや、又職
業を、努めむ——て、如何ほど、
金を得べけんや、

怠惰ある人も、常に財に乏
し、見るべし、彼れが、たまた
る靴より、足の指を、出たせ
り、彼れも新き靴を、好まざ
るに非む、されども、金あく



して、如何に靴を得べけんや、
彼をえ、已の家に妻あり、○其妻も、如何なる衣裳
を、着たりと思ふや、必む破きたる、衣裳を着たる
べし、
彼をも、時として、少しの金を得ることあり、され
ども、此金を以て、衣裳あどを買ふことなく、實に
非常の惡しき癖ありて、即時に其金を、費やま
のあり、今その次第を、次の回に説示をべし、

第十二回

此圖に、示せる人も、又前の怠惰ものにして、今日

少しの金を得たり、されど
も、已の家に、歸らむして、直
に、酒店に行きたり、
彼れも、甚だ大酒にて得た
る金の、盡るまでも、酒を止
むることなく、
彼も、十分に、酒を飲むとき
た、其心狂亂して、暴行をふ
し、或も無益に、大道を歩行し、終に路傍に倒れ、前
後も知らず、眠ることあり、



此故に彼とて、時とて、少一の金を得るとも、忽ち飲酒の爲に、こきを失ひ、少一も衣裳等を、求むることを得ず、

斯る所業の人と、生涯、貧窮にいて、卑賤を免うれざるあり、

人々、少く、酒を飲みて、愉快を覺ゆるとき、これを止む事を、精神の養ひとあるべし、

然れども、大飲いて、身體の動うざるに至ると、大なる害あり、

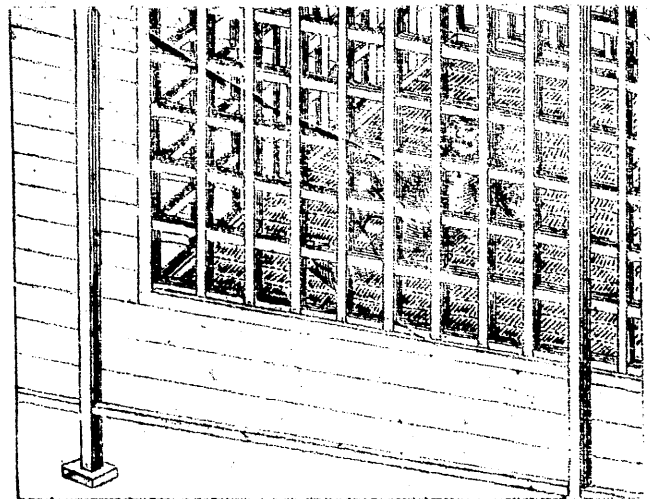
抑、怠惰と、飽飲とと、大惡事にいて、これより多く

の惡業を生む、又大飲をれむ、翌日身體勞れて、職業をおぼこと能む、職業をおさざれむ、金を得ることおぼし、金を得ることおぼし、我日用の品に乏くして、萬事不自由なり、故に、或は惡くも道まても、金を得んことを願ひ、人を欺くに至る○此故に、人常に、戒むべきは、怠惰と、飽飲あり、

第十三回

既に、前回に、示したる怠惰人も、益々飲酒するこ
と多くして、職業をおぼことおぼし、稀にも、自ら職
業をおさんと、思ふことおぼし、身體極めて、懶

情とふりて、其身も、我心の自由に、ふること能む、
此故に、日々慢遊して、一業をも、ふさぐれむ、一錢をも、得ることふ、
然れども、飲酒の心を止むることを得む、如何にも、
て、金を得、飲酒せんと、思ひ居たり、
が、この一念、益々増長し、
終に惡意を生じ、他人の財を得んこと



を欲して、夜々近傍の家に、忍び入り、金銀を盗み取りて、飲酒の料とふり、
斯る惡業をふむこと、度々ふり、
遂に其惡事、發露に及びて、獄屋に繋ぐれたり、
見るべし、此人を獄屋に入りて、藁の上に居れり、
今日に至りても、更に一滴の酒をも、得ること能む、
暗き處に只一人あり、絶て心を慰むるものあり、
既に、惡事を犯したまふ、今、更に、悔悟せといへども、
身を救ふの術なく、
終に、獄中に死せりと

いふ、然れども、已の家にも、妻と、小兒一人を残せり、其妻も、如何にして、身を養ひ、又小兒を育つや、其次第を、次の回に、説示をべし、

第十四回

儲、此獄中に、死したる人の妻を、食き家にありて、其小兒を、育てんと、然れども、家を元より、極めて、貧にして、一銭の貯へもあらず、然るに、其夫も平生、怠惰ふるものにして、且、大酒を好み、遂に貧苦の爲に、惡事を行ひたむを、今妻

子のも残り、艱難、苦勞もとも、村里の人々、こゝを憐れ、助くるものあり、

此故に、妻も日々、他人の衣裳などを洗ひ、僅うに、其日の活計をふせども、元より女の事ふれむ、多分の金を、得ることなく、動もまれむ、小兒を餓やまことあり、



何にと、おれべきやうなく、日夜悲歎して居たり、終に、其家にも、住み難くふりけむを、妻も、小

兒を負ひて、故郷を立ち去りたり、
されむ、人の戒むべきを、怠情と、飲酒ふり、自ら大
酒ふることを知らむ、決して酒を味ふことふ
れ、また酒を商ふ場所へ、至ることふれ、味えむ
近寄らざるを、第一の安全あり、
夫を、酒も、能く人を玩弄し、亦能く人を狂亂せし
む、○人の難澁するも、人の悲歎するも、人の争論
するも、又無益の言を語るも、道理なき事を行ふ
も、皆酒の、ふさふさする悪業あり、

第十五回

此圖も、田舎の景色あり、い
ま、畑より穀物を、積みたる
車を挽きて、歸り來り、家の
門に、入らんとす、○此積み
たる荷の上に、三人乗りた
り、一人の農夫も家より出
で、荷車を迎へり、
汝も、此穀物を、何と思ふや、
○こもえ、小麦あり、此穀物
も、日に乾う、後穂をおち



落し、又これを舂きて糠と、藁とを區別け、○其實のみとふれるとき、臼にてこれを挽き、小麥粉と爲し、各家に貯ふ、
此小麥粉を饅頭、索麵等を製するに用ゐるものなり、
麥の種類も、小麥、裸麥、燕麥、大麥あり、是等と米、豆、稗、粟等を合せて、穀物といふ、穀物を皆動物の食と爲し、身の養ひとふるものなり、

第十六回

茲に一人の男あり、兄弟の兒を集めて、種々の珍

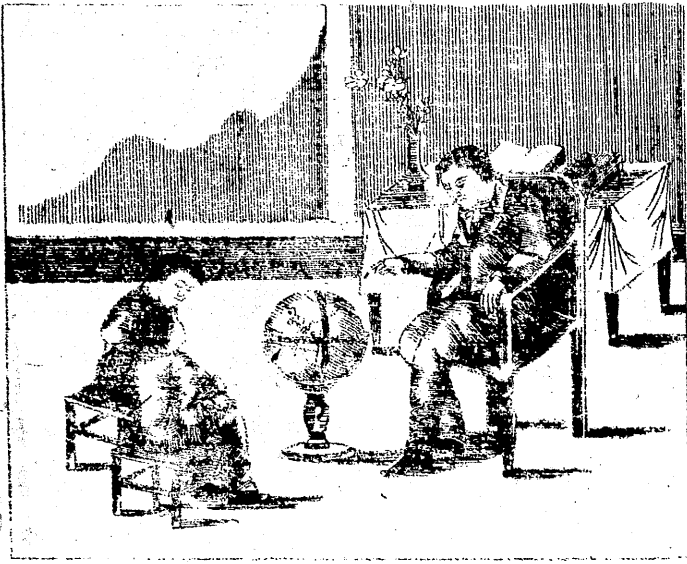
き物を見せしむ、

父曰、予前年、此世界を一週せしとき、數多の國々に到り、種々の物を見たり、一度、甚だしき寒國に到ることあり、三個月の間、日光を見ることなく、其間、常に夜あり、此國の住民も、雪又氷を以て、家を造り、人を皆、其内に住めり、○兄弟曰、斯る國も、何處にありや、○父曰、此國は、地球の南極と、北極に近き處にあり、
父曰、予其國に於て、一の高山を見たり、其頂上は甚だ高く、且甚だ寒し、頂上にある雪も、絶えて溶

くることあり、人も、此山に登るとき、其頂上
に達せざる前に、凍え死す、○兄弟曰、大陽は何
処に、其雪を溶かざるや、又其處に夏を知らざ
るや、○父曰、其國も、夏といへども、我國の寒中よ
り猶寒し、然れども、山頂より、火を吹き出だす高
山ありて、吹き出づる火烟も、恰も烟筒の烟のご
と、予曾て、山頂より、吹き出だす烟を見しに、
我家の烟筒を集めて、一萬以上に、至らざれを、か
かる烟も、出でざるべしと思へり、
さて、父の語も、甚だ大なる、ことなれども、決

て、虚言にあらず、真實の語なり

父又曰、予、大海を渡ると
き、漢師の捕へたる、鯨を
見たり、此鯨も、至て大
なるものなり、其長さ、凡
十間餘ありて、體の高さ、
三間餘あり、數多の漢師
も、鯨の腸腹に、穴を穿ち、
腹中に入り、桶を櫓ひて、
脂を汲み出だせり、



其他、大なる獸類を、數多、見たりと云へり兄弟の
兒も、喜びて、父の話―を、聴き居たり、
實に、小兒も、謹みて父母の話―を、聴くべし、
夫れ、父母の命を、我身に益ありて、智識を増し、道
理に協ひたることなれを、子たるものも、柔順に
して、教へに従ふべし、これ身を立つるの、基ひあ
り、
父母も、我を育て、年々長し、智慧も、優きたれを、
其教へに、慎み順えむことと、もとよりにて、親の
訓誡を、國の制律と同じく、敬と畏きて、苟も、その
命に、背くべからば、

第十七回

一女兒が、池上に小舟を、浮めたり、其舟の帆を、只
一張あり、女兒も、此舟に、結ひ付けたる、長き紐を
操れり、これ、舟の、遠く流るゝとも、失さざる爲あ
り、
此女兒の、浮めたる舟を、一本の橋ある處に、こ
きをスループと云ふ、
總て、舟の橋を帆を張り、風を受けて、舟を動かし
ものあり、恰も大海に、浮める大船と、同し理あり、

又一男兒も、小舟を持ちて、これを池上に、浮めんとす。此舟も、二本の櫓あり、こまをスクーネルと云ふも、三本の櫓あるときも、これをシツプと云ふあり、總て、斯の如き舟を、帆舞船といふ、帆を張るのみにて、走るものあり、帆も木綿の、厚き織物にて、造れるものあり、



船中にて、人の、もたらぐ處を、甲板といふ。○船の首を、艀といひ、船の後を、舳といひ、右の側を、右舷といひ、左の側を、左舷といふ。○船後に、突き出で、水中に、入りたるものを、舵といふ。舵も、船の行くべき、方角を定むるものあり、

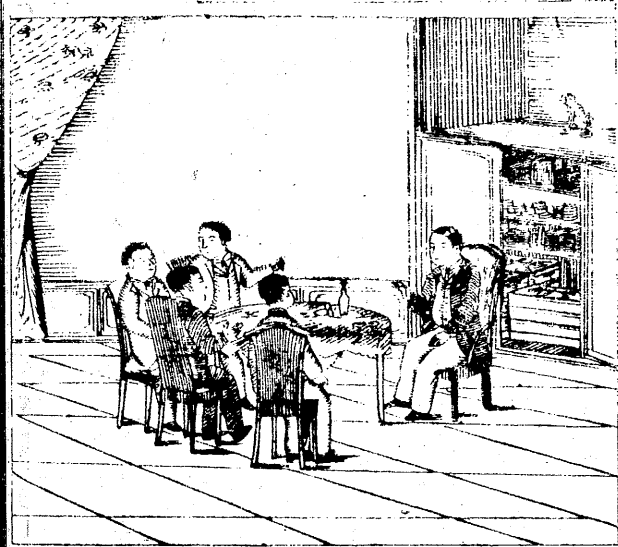
第十八回

神も、此地球を造り給ひて、人民の生活する爲に、入用の物も、皆此地球上に、生せしめ給へを、人々其道を盡くして、これを求むるときも、何物にて得ざることあり、然きども、人々の善惡と、勤怠

に従りて、物を得ると、得ざるとあり、且又人の勞
 めに従て、物を得るに次第あり、
 今、遊戲にのみ、心を用ゐて、他事に少しも、身を用
 ゐざれば、此地球も、徒に遊戲の場所とあるのみ、
 又財を積まんのみに、心を勞して、他事に心を用
 ゐざれば、此地球も、只財を埋むる場所とあるの
 み、
 も、風車、水車等の機關を設けて、世間より利ある
 ことを計るとき、この地球も、種々の機關を、設く
 べき場所とあるあり、

然れば、人々能く心を用ゐて、世間に利あること
 を計るべく、世間に利あれば、亦必ち、我身に利あ
 るものあり、此の如きとき、此地球を造り給へ
 る、神慮も、憐れむといふべく、
 今、この圖に画けるも、富人にして、多分の貨幣を
 出だして、こゝを衆人に示さし、衆人大に感得て、
 これを見たり、蓋し此輩も、斯る多分の貨幣を得
 たることふきめあるべし、
 さて、此富人も、曾て學校に入り、多年の間、勉強し
 て、多般の學術を覚え、先きより種々の機關を發明

ト、大に世上に、利益あることを工夫し、今、亦其身
も、大利を得て、斯る富人となりたるあり、



富人も、衆人に告げて曰、
夫れ、此地球も、大活物に
して、勉むるを、必ぞ其報
あらざることなし、人々
甚だ苦勞する事を勉め、
且世用に、益あることを、
工夫をれむ、其報も必
大にして、利を得ること

多きものあり、骨折をざる業を爲し、或は只
身し利あることを勉むるを、其報必を小に
て、利を得ること亦少し、予も多年の間、刻苦して、
漸く利を得たれども、今に至りて、猶無益に時を
費やれこと多く、亦無益に財を費やれこと多く、
諸人々業を勉めて、得たる貨幣も、皆我有るを、
これを費やれども、隨意ふれども、無益に費やれども、
正しき道理にあらず、且美服を着るを以て、人
に驕り、僅々の貨幣を得るとき、心し怠るを、實に
愚にして、且不善あり、

抑貨幣の、尤要用たるも、衣服、食糧を求め、或はこれ
を貧人に與へて、彼等の飢餓、凍餒を救ふより
り、
貨幣を得て、これを惜み貯へ、世間の用に供へば、
又貧人にも與ふることなく、又我富を以て、他人
に驕るゝ、愚にして且、吝ふるものあり、人も必
にこれを憎み、神も必に、これを罰まべし、
夫れ、貨幣を用ふる道に由て、良きものとふり、又
惡きものとふる、故に道の當否に従て、利害とも
に、貨幣より起るものあり、

故に怠惰にして、貪賤ふるも、實に耻づべきこと、
といへども、亦貨幣を愛着するも、害の根原あり。
人々、出精して、業を勉め、以て富有を計るべし、既
に富有を得れば、これを世間の用に供へ、且貧人
を救ふを、第一とまべし、

第十九回

平生、斷えむ、業を勉むるも、樂しうらば、又斷えむ、
遊戲のみを、事とふは、樂しうらば、故に就業の
時間も、出精して、業を勉め、後遊戲するときは、甚
だ快きものあり、

就業中に、出精せざるるときは、其心は耻を懷きて、快うらひ、行ひの善良あるを、心の快きを得る良法なり、怠惰ふるものな、心の快きことあり、如何とあれば、其行ひ、常に不善ふるゆゑに、耻ありて、心の快きを、害するを以てあり、一事を爲さんと欲せむ、必ち放心をすることなく、一時に之を成就せむ、或は事業多くして、力に餘ることありとも、放心油斷なく、これを勉むれば、必ち其効ありて、能く成就に、勉むれば、何事も易く、勉めざれば、何事も難し、

命も、書物を學むと欲するときは、如何に難き所にても、之を止めず、勉強し、學び得るにあらずれば、他事を爲はことあり、縦令ひ、力に餘る簡條にても、放心餘念なく、勉強せられ、之を、理解せむべきものあり、苦みおければ、樂みあらば、勉めざれば、遊歩も樂しく、故に書を學ぶときは、其文を理解して、後遊歩もべし、業をなすときは、其業を成就したる後、休息をべし、然るときは、心は耻づることなく、を以て、遊歩も身の攝生と、ふるものあり、

抑耻も、人心に於て、大に感動をもつものなり耻を
知るときも、人々怠慢放肆ふることなく、平生事
を行ひ、業を勉むるに方りて、我心に耻づること
ふらんことを欲するも、身を守るの要務あり。
今業を勉めて就らば、書を學びて通ぜざるも、大
なる耻ふり、この耻を知りて、出精勉強するこ
となく、業の就らざることなく、書の通ぜざるこ
となく、

さて、人の、此世に生れ来るも、元來天工を助けて、
國土の用を、遂げしむるものなれども、何等の業

をも勉めば、國家の益をふさざるものも、自ら禍
を招きて、困窮に陥ることあり、此等も、天に耻ぢ、
人に耻ぢ、又我心に耻づること大なり、
神明も、妄りに幸福を與へば、人を以て、自らこと
を取らしむるものなれど、唯耻を知りて、能く勉
強するものも、幸福を得、耻を知らざるものも、困
窮貧苦するものを知るべし、

第廿回

夫も、禮も、教化の本にして、人民の惡念を止め、善
端を開き、人道を、離さしめざるものなれど、須臾

も、禮讓の心を失ふべからば、抑、性も、本善あるを以て、人々禮讓の性を脩へざるものあり、然れども、人慾の私に由て、遂に本全の性を失ひ、放肆、遊惰のものとなるなり、人々、幼稚のときより、人慾の私に克ちて、禮讓を復るべし、實に禮を知るも、身を立つの原あり、父母に事ふるときも、孝養あるべく、長上に仕ふるときも、恭順あるべく、兄弟の友愛あるも、朋友の信義あるも、親族の協和あるも、皆禮讓を以て本とに、

貪慾の念を肆にすることより、愈怒の心を逞ふることあり、實に、貪慾の念あり、愈怒の心あるときも、事を行ひ、業を勞むるに當り、感謝して正路を得ること能はば、夫れ貪慾も、私情の惑ひにして、此念を絶たざるときも、遂に残酷の人となる、愈怒も一時の狂疾にして、此心を抑へざるときも、遂に争鬭の端を開く、必竟々、皆幼稚のときより、已に克ち、禮に復ること、能えざるより、由る此故に、須臾も禮讓の心を失ふべからば、

古語に曰、恭謙あるときも益を受く、傲慢あるときも損を招くと、譬へむ、日中をれむ順き、月満つまを缺くるが如く、終日、業を務むまを心中に爽快を覚え、今日、遑怠ふれむ、翌日、繁忙の愁あり、又曰、終身、道を譲るも百歩を枉けに、終身、畔を譲るも一段を失ふべしと、禮讓の得ありて、失ふまを知るべし。

第廿一回

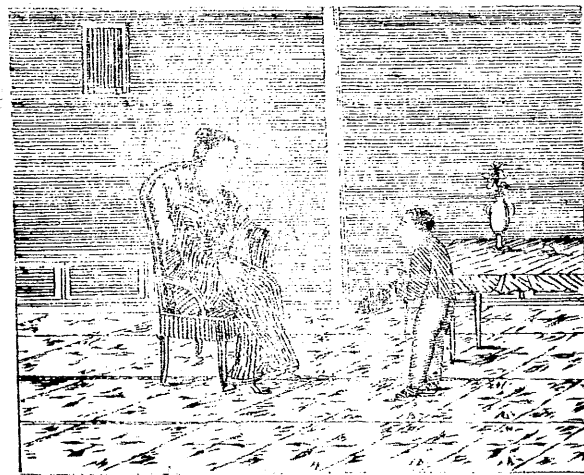
昔、一人の童子あり、天性至孝にして、能く其母に事へ、曾て其命に逆ふことなかり、母、朝々事を命

せむ毎に、直に立ちて、こゑを行ひ、更に怠ることなかり。

母嘗て、紡絲を繰りて、糸環に紉ふことあり、其子に命じて、紡絲を手掛けしむ、童子も絲を紉ふとの間、過ちて紡絲を紛亂し、解せざるに至る、依て、急よこれを解せんと欲して、却て緒を切斷せり。

童子も、周章して急よ其緒を求め、苦心して一の緒を得たり、依て頻にこれを引けむ、益、固結して、復解くべからざるに至り、狼狽して又一縲を切

斷せり、其母之事を止めて曰、汝過ぎり、斯くもる
所を以て、斯く欲する所を
求めむ、適其紛亂を益すの
み、暫く、汝が心を静にし、思
ひを平にして、正き緒を求
むべし、既に正き緒を得れ
む、亂れたる絲も、自ら解く
るものあり、
母、又童子に告げて曰、夫れ
世の業を勞むるも、猶、亂れたる絲を理むるが如



く宜しく是に由て、汝の終身を計るべし、世に處
り、事に臨みて、苟も私慾、忿怒、迷惑して、己の血
氣を抑へされむ、縱令ひ苦心焦思して、其力を盡
くむといふとも、徒に勞ありて、功なきものぞ、
人、常に世事の擾亂を憤り、奮つて急し、これを整
理せんと欲し、却て其擾亂を益すものあり、譬へ
む、今、此童子が、亂れたる絲を繰り、彼此を引き出
だして、却てこれを紛亂するが如し、これ必竟、惑
ひの雲、晴れざりて、世事の正き緒を得ざるもの
あり、

凡、人々、堪忍の心なく、動もせられ、忿怒して、自ら血氣に任ぜるものも、必だ其事を破る、此の如きものも、皆義理に暗く、人道に通ぜざる也、又、心カ、益、疲弊し、狐疑、迷惑の雲、晴るゝ間なく、真如實相の月を見ること能く、終にも世途の岐路に踏み迷ひて、放縱嗜慾の海に沈溺せんものも、天下の廣き、人民の衆き、或は富貴あるものあり、貧賤あるものあり、或は幸あるものあり、不幸あるものあり、實に逢遭一ならず、これ皆、自ら定まるものなり、放縱、嗜慾の海に、沈溺するもの

も、定業あるを察せ、て、非分の榮華を求め、意外の妄想を生む、動もせられ、世事の、我意に適せざるを怒り、天を怨む、人を咎むに至る、必竟も、朝夕營々とて、其徳を恒にせば、或は浮言に動かし、或は世途に迷惑し、曾て世事の正き緒を、求めざる也、又あり、

人生も、皆、亂れたる絲の如く、これを修理する法も、善教を聴き、善道を行ひ、禮義を規模とて、以て身の曲を矯るゝあり、故に世事の正き緒を求め、心を磨き、行ひを勵まほとき、我家も、忽ち修むべ

く、紡絲を直に解まべし、
抑、天下成し易きの業あり、亦成まべうらざるの
業あり、各其業を守るとき、業の成らざるこ
とあり、各其志を安んずるとき、志迷惑まること
あり、蓋し、身の習ふ所を業とし、心の向ふ所を志
とし、習ひ、既に専らあるとき、向ふ所、自ら定ま
る、人々此の如くあるとき、世事の正道を得る
も亦難うらば、

小學讀本卷之三 終

小學讀本卷之四

第一回

人民、住居スル世界ヲ、地球ト云フ、其形ハ、殆ド
圓ナリ、サテ、何ニ由リテ、地球ノ形ノ、圓ナルコト
ヲ、知ルト云フニ、燈火ニ、玉ヲ照セバ、其影ハ、玉ノ
如ク圓ナリ、又書物ヲ照セバ、其影ハ、書物ノ如ク
四角ナリ、又月蝕ハ、太陽ト月トノ間ニ、地球ノ入
リテ、其影ノ、月ニ映リタルモノナルニ、月蝕ノ暗
キ處ハ、常ニ圓ナルヲ以テ、地球ノ形ハ、圓ナルコ
トヲ知ルモノナリ、